

# オピニオン Nonフィクション

## 百年の蹉跌

ロシア革命とブーチン

▶50

### 第8章 5

モスクワ市内に、ソ連時代の収容所ラーゲリの歴史を伝えるグラーク史博物館がある。今年9月6日、遠く日本からある日本人の遺品が届けられた。灰皿やメモ帳、ラーゲリで実際に使用していた温度計……。ヨシフ・スターリンの大粛清で1930年代のラーゲリを経験し、日本への生還を果たした勝野金政が、生前愛用していた品々だった。

勝野はフランス留学中の1920年代に共産党に入った。国外追放処分を受けてソ連に入国し、コミンテルン(共産主義インターナショナル)で活動していた片山潜らと交流を深めた。モスクワ東洋学専門学校で日本語を教えたりしていたが、30年に「日本のスパイ」容疑で国家政治保安部(GPU)に逮捕・投獄された。

この頃のソ連には、大使館の把握していた新聞記者や商社員以外にも、約1000人の日本人が暮らしていた。

「野坂参三ら日本共産党の指導者」「亡命した元東大助教

授、国崎定洞ら知識人」「北海道や樺太からの政治亡命者」「極東ワラジオストクなどに入港して住み着いた漁民・船員」といった人々だ。

知識人や政治亡命者は共産主義を奉じていた。漁民・船員や労働者も多かれ少なかれ、ソ連を「労働者の天国」と考えていたようだった。

これら日本人のうち少なくとも26人が銃殺など大粛清の犠牲になった。消息が分らない日本人も50人以上に上る(※1)。

♪ ♪

当時、日本人は「仮想敵国のスパイ」として、格好の標的にされた。ソ連当局は、1人を「人民の敵」として捕まえると、拷問を加えて友人・知人の名前を割り出し、次々と「スパイ」に仕立て上げた。

勝野は北西部のラーゲリに収容され、他の「囚人」とともに白海バルト海運河建設の強制労働を課された。

白海とオネガ湖を結ぶ全長227kmの運河は、1931年11月から33年8月にかけて、「5カ年計画」による工業化路線の目玉事業として突貫工事で建設された(※2)。最も多い時で10万人の「囚人」が作業に当たった。

「ソ連政権は、社会主義建設の新たな可能性を全世界に見せよとした。わが国では囚人が労働によって矯正され、完全なソ連の人間になるのだ」と主張し

た」。弾圧の歴史を調べる団体「メモリアル」の職員はこう解説した。

実態はひどかった。工事には地元の資材を使うよう命じられ、セメントもろくに与えられなかった。極寒の地でバラックやテントに住まわされ、粗末な食事で酷使された。現場一帯には、常に「社会主義建設の勝利」を宣伝するラジオの音が鳴り響いた。

公式には、この運河建設で1万2300人が死亡したとされる。実際は、それよりもはるかに多かったとの見方が強い。運河自体も工事を急ぐために水深が3・6メートルまで浅くされ、ほとんど使い物にならなかった。

♪ ♪

スターリン時代にはラーゲリが全国各地に設けられ、ソ連は「収容所群島」と化した。博物館の館長、ロマン・ロマノフは「それはロシア革命に端を発している」と強調する。

「革命により、国民がわれわれとやつら、労働者階級とブルジョアに二分され、敵がつけられた。やつらをどうするのかがということになり、隔離し、働かせようとなった」

ラーゲリが設けられたのは革命から間もない18年だった。当初は「敵の矯正」をより意図していた。スターリンはそれを体系的に発展させた。

「囚人」を大規模事業に「労働力」として投入した。鉄道建設や資源探掘、辺境開発など主要な経済分野全てにラーゲリを組み込んだ「壮大な収容所経済システム」が生まれた。

第二次大戦後の「シベリア抑留」は、その一環として起きた悲劇だった。(敬称略)

## 矯正から労働力へ 収容所群島の悲劇

グラーク史博物館に寄贈された勝野金政の生前の写真など(アンナ・ニコラエワ撮影)



※1 産経新聞2013年4月18日付朝刊  
 ※2 白海バルト海運河には、北極海に出るための航路を大幅に短縮する狙いがあった。この運河と河川や湖によって、レニングラード(現サンクトペテルブルク)から白海に至る850kmが1本の水路でつながった。スカンディナ비아半島を回らずに北極海に出られるルートを設け、北極海沿岸部の開発につなげる思惑だった。



モスクワ支局長 遠藤良介